

113 學年度第一學期 Eurasia 基金會 (from Asia) 國際講座
第七期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(11)

講題：国宝との出会い

余佩瑾 常務副院長

(2024. 11. 28)

要旨

一、はじめに

まず、故宮文物が台湾へ移された歴史を簡単に述べます。故宮文物の一部はもともと紫禁城に収蔵されていたが、1925年に紫禁城が博物館となり、清朝皇室の収蔵品が博物館の公共財となった。1931年の日中戦争の勃発により、これらの文物は南方への移転が始まった。その後、国共内戦のため、これらの文物は台湾へ渡ることとなった。台湾到着当初は霧峰の北溝に15年間仮置きされ、最終的に1965年、台北市士林に落ち着き、世界的に有名な国立故宮博物院となったという。

現在の北部院区に加え、2015年には南部院区が完成された。来年(2025年)には北部院区が設立60周年を迎え、南部院区が10周年を迎えることになり、その上文物が博物館の公共財となってから100周年にも達する。

二、国宝とは一体何か

次に「国宝とは一体何か」ということについて説明された。講演者は、国宝には2つの種類があると説明された。一つは国家が正式に公告した国宝、もう一つは自分自身の心の中で思う国宝である。『文化資産保存法』第66条の6つの文物の分類基準を満たせば、国宝と呼ぶことができる。その中でも第5項「唯一無二で代替不可能であること」という条件が、国宝とは何かを最もよく説明していると思われる。

故宮が所蔵する698,887点の収蔵品の中には、唯一無二で代替不可能な文物が多く含まれている。たとえば、全36,000冊から成る『四庫全書』は、唯一無二で代替不可能な国宝の一例です。

また、故宮の公式サイトの閲覧数は、民衆の文物に対する好みを反映している。講演者は今回の講座で、閲覧数1位の清院本『清明上河図』、13位の『翠玉白菜』、3位の『赤壁賦』について詳しく紹介された。さらに、定窯の白磁

の嬰兒枕、汝窯の梅瓶及び水仙盆などについても取り上げた。

三、清院本『清明上河図』

『清明上河図』は、開封城の虹橋と呼ばれる街の風景を描いた作品で、巻物形式の絵画である。全長は 1152.8 センチメートルにも及ぶ。この作品は、陳枚、孫祐、金昆、戴洪、程志道の五人によって 1728 年（雍正 6 年）に描き始められ、1736 年（乾隆元年）に完成した。さらに、装丁に 1 年を費やし、合計 10 年の歳月をかけて現在私たちが目にする清院本『清明上河図』が完成したという。

『清明上河図』は、当時の皇帝が理想とする都市の青写真を反映した作品である。絵の中には合計で 4000 人以上の人物が描かれており、それぞれ異なる活動をしている。子供、大人、物を売買する人、物をうっかり落としてしまう人、さらには街で喧嘩をしている人も描かれている。人物の高さは最大 3 センチ、最小 0.5 センチという。さらに絵の中には西洋式の建物も描かれており、当時の人々の視野や世界観を想像することもできるという。

四、翠玉白菜

ネット閲覧ランキング第 13 位の翡翠製の白菜『翠玉白菜』は、多くの人々に愛され、まるで故宮のモナ・リザのような存在となっている。この『翠玉白菜』が展示されていない場合、チケット売り場で明確に案内を出さなければ、見られなかった訪問者がチケットの払い戻しを要求することもあるほどだという。

この『翠玉白菜』は、永和宮の瑾妃（光緒帝の妃）の嫁入り道具の一つだったと言われている。『翠玉白菜』は一塊の翡翠から彫られたもので、菜茎や葉脈が非常に細かく彫刻されている。白菜の葉は鮮やかな緑色をしており、職人の卓越した技術が見て取れる。白菜の葉の上にはキリギリスとイナゴが彫られており、これらの昆虫は一度にたくさんの卵を産むことから、『翠玉白菜』は清らかさと子孫繁栄の象徴とされているという。

故宮には全部で 3 つの白菜が所蔵されている。上述の『翠玉白菜』のほか、葉の上にカマキリが彫られた小さな白菜や、花瓶にさす型に作られた翡翠の小さな白菜もあるという。

五、蘇東坡と赤壁賦

ネット閲覧ランキング第 3 位は、蘇東坡が書いた『赤壁賦』である。蘇東坡（1037 年～1101 年）は 11 世紀後半の人物であるが、故宮の文物の中には、同時代の人々が彼の肖像画を描いた作品は見つからないという。しかし、元代の趙孟頫（13 世紀後半）が描いた蘇東坡の肖像画が所蔵されている。また、故宮の文物には、18 世紀前半（1737 年）に陳祖章が彫刻した小さな船がある。この

船は非常に小さく、わずか3.4センチ×1.6センチのサイズである。この小船の中には合計8人が彫られており、その中には蘇東坡と彼の友人、小さな従者も含まれているという。小船の扉や窓は可動式で、開閉が可能である。さらに、船の底には300字余りの『後赤壁賦』が彫刻されているという。ちなみに、この小船はネット閲覧ランキングには入っていない。

『赤壁賦』の時代背景は、左遷された蘇東坡が友人とともに赤壁で舟を浮かべ、夜遊びを楽しむ中での出来事である。主客の対話を通じて、歴史の盛衰への感慨を伝え、超然とした人生観を悟っている。『赤壁賦』の中には、「寄蜉蝣於天地，渺滄海之一粟」（蜉蝣を天地に寄せ、蒼海の一粟に渺たる）という有名な一節がある。しかし、この展覧品には「寄蜉蝣於天地，渺浮海之一粟」と書かれており、これが今年の話題となったという。

故宮が所蔵する『赤壁賦』は「42日間限定展示品」である。「42日間限定展示品」とは、故宮が所蔵する書画の中でも、70点の逸品中の逸品であり、一度展示される期間は42日間のみとなっており、展示が終わると、必ず庫房に戻され、3年間は再展示できないという特別な規定があるという。

六、結び

故宮の所蔵品は、現今の世界においても最も優れた工芸品ばかりである。本日のテーマ「国宝との出会い」では、講師が故宮の歴史や文物、そしてそれらにまつわる物語を多く紹介された。このような共有を通じて、皆様が故宮を訪れる興味を喚起できればと期待している。

中国語要旨・まとめ 涂玉盞

日本語翻訳 陳順益

2024.11.28